ターレシュ／アルボルズ山系（イラン）の先史遺跡

——鉄器時代以前へのアプローチ——

Search for the Archaeological Sites Dated
before the Iron Age
in the Talesh/Alborz Mountains, Iran大津忠彦^{*}
OHTSU Tadahiko

はじめに

イランにおける考古学研究の動向について、筆者はかつてその梗概を記し問題点の一端を紹介したことがあった。⁽¹⁾これと前後する1990年度より1996年度まで、中近東文化センターではその研究事業の一環としてイラン各地を対象とする遺跡踏査を継続し、考古学的諸遺跡の現状や博物館、関連機関の機能状況についての見聞情報収集に努めてきていた。活動のねらいは「イラン・イスラーム革命」(1979年)以降のイラン考古学に関する閉塞の情報不足を少しでも補うことにあった。これらについては中近東文化センター発行の年報『MECCJ』にそれぞれ簡報がある。⁽²⁾しかしながら、遺跡踏査という現地活動の性格上、イラン側関係当局の理解と協力、わけても調査活動に対する公的許諾の付与および情報提供をはじめとする共同作業が不可欠であることが次第に痛感されるようになった。大津らはイランにおいて問題解決の糸口を模索するとともに、1995年以来、在日イラン大使館を通じて公式に、イランでの考古学的調査活動許可申請を行い続け、さらには同大使館の助言を得て、イラン文化遺産庁宛の要望書ならびに調査活動計画案を提示した。これらに対しては、1997年6月27日から同年7月16日までの期間、幸いにもギラーン州が中近東文化センターの調査隊を受け入れる形態で現地踏査が実現し、さらに1999年2月22日から同年3月14日までの期間、補足的現地踏査を行うことが可能となった。⁽³⁾これはイランの現体制下では、極めて例外的かつ変則的な「外国調査隊」による考古学的活動であったことが、イラン当局とのその後の折衝過程で判明した次第である。しかしながらそれは我々にとって、はじめてイランにおける最新の考古学事情の一端を濃密に直接知り得る好機ではあった。本稿では中近東文化センターによるイラン遺跡踏

* 帝京平成大学助教授、中近東文化センター研究員
Associate Professor, Teikyo Heisei University, and Research Fellow, The Middle Eastern Culture Center in Japan

査、とくに1997年以来継続中のギーラーン州を主とする北部イラン地域すなわちターレシュ／アルボルズ山系域、なかでもカスピ海南および西岸域の踏査を通じて、改めて考えさせられた当該地域における考古学的課題のいくつかについて論じてみたい。

カスピ海西岸域

カスピ海南および西岸域に沿うターレシュ／アルボルズ山系はカスピ海からの風を遮り、現況そこには樹林緑草地帯がひろがる。草木が通年繁茂する自然景観は、同山系より内陸側の沙漠を含み持つイラン高原と著しい対照をなしている。イラン地理の区分上「Northern Highland and Caspian Lowlands」⁽⁴⁾と称されるこの地帯では、とくに19世紀半ばより「秘宝」と通称される古物の偶発的発見が相次いだ記録が伝わっている。もちろんキャラールグシュト遺跡（マーザンダラーン州）やマールリーク遺跡（ギーラーン州）などの事例のように、革命前のイラン当局が考古学的調査を行って一定の成果を学界に寄与した遺跡もあるものの、かえってその取り組みが、この地域の宿命ともいえる「遺跡盗掘活動」をさらに助長したという苦い経歴を併せ持つ。1959年、第二次東大イラク・イラン遺跡調査団の先発隊が、テヘラーン市中においてアムラシュ（ギーラーン州）由来と告げられた、かの正倉院伝来「瑠璃碗」と同型のガラス器およびその考古学的重要性を洞見したのは、まさにそのころであった。⁽⁵⁾いま便宜上、当該地域を西より見て行くと、かのモルガン兄弟（Henri and Jacques de Morgan）が「ペルシア領」ターレシュ山間域において先駆的遺跡分布調査を行い、ハサンザミニやアークエブレル地区において共同墓地を構成する多数の「ドルメン」を明らかにしたのは1901年であった。⁽⁶⁾この地域において実質最初の試みともいえるモルガン兄弟による考古学的調査の成果はその後シェファール、ダイソンあるいは江上波夫らによって青銅器時代から鉄器時代への移行期を考察するうえで意義付けられてきた。⁽⁷⁾ターレシュ（ハシュトバル）を流れるギャルガンルード川上流に位置するこのアークエブレルでは1997年にイラン当局によってあらたに群集墓（鉄器時代）が発掘されている。一例では、長さ15m、幅2.5mの石室を巨石で構築し、被葬者は10人程度と考えられている。また、これより東部に位置する同川の一支流に位置するアスブサラーでも、紀元前2千年紀に遡るらしい古墓の群集が1998年、イラン当局によって調査確認された。ここでは環状配石の中央に、床が粘土貼りされた切り石による石槨（長さ13m前後）の例があり、追葬が認められたといわれている。これらはいずれも巨石を用いた群集墓という共通点があり、正式の報告書は残念ながらないものの、類例は他所にも存在することが想定されている。確証に乏しいものの、仮に「青銅器時代から鉄器時代への移行期」と、従前どおりの年代観を踏襲しておきたい。カスピ海西岸当該域では、上記のような群集する古墓の存在が、ほかにシャファール

30. アグエヴレル 31. ジャンギレ・ハフトダゲナーン 32. ヴアスケ 33. ミヤーンルード
34. シャールマー 35. マースーレハーニー 36. アスバリーサ 37. アスフサラ

図1 ターレシュ地域遺跡分布図 (大津, 岡野編2000, 25より)

ルード川上流域のヴァスケ, ミヤーンルードおよびブルーデ・シャルマー川上流域のシャルマー, マースーレハーニーでも確認されている(図1)。ただ, 奇妙にも紀元前2~1千年紀の土壌墓, 石槨墓などから成る群集墓だけがこれまで知られた遺跡形態のほとんど唯一例であった。しかし, 1997年以来継続中の遺跡踏査からふたつのことが注意され

図2 アスバリーサの「ダフメ」

る。ひとつはルーデ・シャルマー川上流域のアスバリーサ村の南東部にある「ダフメ」の存在である。これは岩の露頭に、約 40×220 cm の墓を数多く掘り込んだものである(図2)。山内和也の観察によれば、それはファールス地方の「ダフメ」と同様のものであり、北部イランでは初例とのこと。もうひとつはマースーレハーニーで見られるような石灰岩洞窟例である。ここからは人骨や石刃、石槍が出土したといわれている。この地域には石灰岩地帯が分布し、マースールやソーマサラーの山間域にはすでに呼称名を有する地点を含む200ヶ所にのぼる洞窟があるといわれている。残念ながら現地当局の、洞窟への対処は未熟であり、ましてや洞窟以上に遺跡としての可能性が高いともいわれる「岩陰」に対する関心、遺跡の可能性についての認識はほとんどないというのが現状である。⁽⁸⁾隣接するアーゼルバーイジャン州以西の資料報告事例などにかんがみて、当該地域でも新石器時代以前に遡る資料の確認をこれら洞窟遺跡に期待できるのではないだろうか。

カスピ海南岸域 (図3)

西岸域と基本的には同様ながら、当該地域は組織的な発掘調査を経て、その成果が公表されている地域、重要遺跡を抱え持つ。たとえばセフィードルード川流域およびデイルアマンであり、中近東文化センターによる1997年以来継続中のギーラーン州を主とする遺跡踏査もそれらの成果に負うところが大きい(図4、5)。ここではふたつの点につ

図3 カスピ海南岸域 (Encyclopaedia Iranica, Vol. 1-8, 814-5, 1985より)

1 キャーラズ(ダグダグ)	2 シェール	3 ジョージ
4 シュー	5 シュー	6 シュー
8 シュー	9 シュー	10 シュー
12 シュー	13 シュー	14 シュー
16 シュー	17 シュー	18 シュー
41 シュー	42 シュー	43 シュー

図4 セフィードロード川流域遺跡分布図(大津, 岡野編2000, 22より)

19 サラ	20 リー	21 カム	22 ミー
23 サラ	24 リー	25 カム	26 ミー
27 サラ	28 リー	29 カム	30 ミー
31 サラ	32 リー	33 カム	34 ミー

図5 デイラマーン地域遺跡分布図(大津, 岡野編2000, 28より)

いて改めて見直しておきたい。

ひとつは、セフィードロード川沿に位置するキャーラズ遺跡ならびにマールリーク遺跡に関してである。前者は革命前の数次にわたる発掘調査成果によって、紀元前2千年紀後半からサーサーン朝ペルシア時代にかけての群集墓（⁽⁹⁾ 堅穴式土墳墓、堅穴式石槨墓、地下式横穴墓）や建造物の基礎石列（？）等が見い出された。ただ、それら墓域の範囲や建造物遺構との関係などは依然不明瞭なままであるために、さきのギーラーン大地震復旧事業に伴う緊急調査(1991年)以降も、ウマの埋葬墓を含む古墓の偶発的発見が相次いでいる状況にある。このキャーラズ遺跡において、これら古墓の集中する地域に隣接して、遺物の散布具合と形状から「タッペ（遺丘）」と判断しうる遺跡が1基存在するのである(図6)。かねてよりギーラーン州内には、文化層の累積が形作るいわゆるタッペは無いとされてきた。キャーラズ遺跡の発掘調査者ハーキャミーはこのことについて、「時代が変わろうと敢えてひとところに留まる必要性のない好適な自然風土」が⁽¹⁰⁾ 当該地域における「異なる生活層」の形成をみせなかったのだ、と論じたほどであった。はたしてキャーラズ遺跡に近接する丘がまさしくタッペであるならば、これまで検出されてきている墓域との関連性が改めて問い直されねばならないし、またかつての発掘調査時に検出の「基礎石列」の性格も再考されねばならない。当遺跡の位置する「キャ

図6 キャルラーズの「タッペ」(写真中央右寄)

ルーラズの谷」はセフィードルード川に連なる多数の谷筋のうちでも最大級の規模であり、キャルラーズ川谷を遡行してそのかなり高所までジュキン、ドガーミヤーンなど遺跡の所在が認められる。キャルラーズ遺跡はこの谷筋の最下に位置し、そしてセフィードルード川を挟んで相対峙するのがマールリーク遺跡である。豊かな副葬品の発見から王侯クラスの墓とも考えられているマールリーク遺跡は、東側よりセフィードルード川に連なる谷筋が大きく開けてはじめての、しかもこの大河に直面するところにある。いわばこれらふたつの遺跡はいずれも川沿いの要衝を占めて位置するとみなすことができよう。セフィードルード川流域における遺跡分布調査が近年進展することによって、それまで出土品の豊かさに偏って注視されがちであった遺跡が、周辺遺跡との関連に留意して改めて問い直されねばならない新たな段階のもとに再提示されてきていると考えられる。

前記のハーキャミー論にみられるような当該地域における「タッペ」の有り様を再考しようとする時、ネギャフバーンがかつてアルボルズ山脈中で行った分布調査成果に関する最近の報告⁽¹¹⁾は興味深い。氏は、チャールス（マーザングラーン州）の西南域をカスピ海へ流れ下るサルドアブルード川上流域のキャラールダシュトから東南のマルザナバードにいたる溪谷の遺跡分布調査によって、200地点以上の考古学的遺跡（イスラーム期の記念建造物を含む）を確認した。そのなかには、具体的に何基存在するかについての

言及はないものの、表採土器資料の帰属時期によって3分類された「mound」タイプの遺跡が含まれる。ネギャフバーンは、マールリーク遺跡のような「自然丘」についてももちろん「タッペ(テペ)」と呼称しているので、氏の分布調査の対象となった「mound」が、いわゆる生活層の累積によって形成されるタッペすなわち「遺丘」を指しているか否かについては慎重であらねばならないが、アルボルズ山脈西寄部における「mound」タイプの遺跡の報告は、この事例がほとんど始めての報告というばかりでなく、ほぼ類似の環境下にあるギーラーン州においても同様に捜し求め得る可能性があるのではないかとの期待を覚えさせ、ここに先のキアルーラズの「タッペ」がいよいよ重要視されねばならない理由のひとつがある。周知のごとく、カスピ海南岸のうち東寄り地域たとえばゴルガン平原は「中近東の全域を通じてあまねく知られているような遺丘⁽¹²⁾」の稠密地帯であり、カスピ海南岸の西寄り地域とは随分とその様相を異にしている。東西の差異はほぼマーザンダラーン州東部のサーリ付近にその境界線が引けそうである。キアルーラズのタッペおよびキアラールダシュトから東南のマルザナバードにいたる渓谷からの報告事例がこの境界線を移動させ得るか否かは、今後の調査あるいは報告にかかっている。当該地域でこのように「タッペ」の有無が問題にされなければならないのは、これまで往々言及してきたように、現況ごく限られた種類、時期の遺跡しかこれまでには判明していないからである。すなわち古墓以外の遺跡形態のひとつとして「タッペ」の存在が注目できるのではないかと、との希望的観測なのである。

さて「紀元前2～1千年紀を遡る遺跡」はどうかというもうひとつの問題がある。これについては、古墓以外の遺跡形態例の一候補であることと共に、さきに言及した石灰岩洞窟遺跡が注意されねばならないであろう。カスピ海南岸地帯ではかつてクーンが旧石器時代までさかのぼるホトゥ洞窟やベルト洞窟(マーザンダラーン州)を調査して以降、革命前すでにいくつかの洞窟遺跡が調査対象になっていた。⁽¹³⁾アルボルズ山脈中の豊富な石灰岩は、カスピ海沿岸における港湾整備事業のための資材のひとつとして採取され続けてきたので、その過程で洞窟遺跡が明らかになったりあるいは消滅したらしいところがある。最近の新発見例で注目されたのは、マーザンダラーン州ネカー近郊に位置するクミシャーン洞窟であった(図7, 8)。イラン当局の報告を要約解説した山内によれば、この洞窟は「中石器時代から紀元前11～12世紀まで使用されたものと推測されている」。⁽¹⁴⁾これとともにサルドアブルード川上流域における調査成果報告が注意されねばならないであろう。ネギャフバーンは、12地点において洞窟遺跡を確認した由。それぞれの洞窟はそれらの入口部にかなりの堆積物を有し、石刃や粗製の石器を包含していた。同報告文中に言う「古代社会の他地域の居住者たちが、すでに新石器時代や定住村落農耕段階を通過して銅石器時代に移った時も、(サルドアブルード川流域では)洞窟居住

図7 クミシャーン洞窟（洞窟開口部は現在封鎖されている）

図8 クミシャーン洞窟近辺に散布する石器（石刃核、剥片など）

生活が続けられていた」との見解は、石器時代に限ることのない洞窟の使用例において先のクミシャーン洞窟と相共通する可能性を窺わせている。すなわち洞窟に遺跡を捜し求めようとする場合、我が国でも行われるように、つい最近まであるいは現在なんらかの用途で機能している洞窟は、おおいにその可能性があることを実証する二例なのである。中近東文化センターによるギーラーン州踏査期間中聴き知ったかぎりでは、石灰岩洞窟に遺跡の可能性を想定して探査を試みようとする姿勢は、地域によって当局ごとの差異が大きい。カスピ海南岸域に限らず、政治的要因からたまたま報告に乏しかった遺跡事例が、少しずつながら着実に数を加えている。きっと期待して良いであろう旧石器時代に遡る洞窟遺跡の発見は、これまでの当該地域における遺跡の有り様の不自然さを見直す端緒となると考えられる。

まとめにかえて—遺跡の分布状況を如何様にするか—

ターレシュ／アルボルズ山系のうちカスピ海に面する範囲（ギーラーン州、マーザンダラーン州西寄部）では、石器時代に遡る遺跡の存在や古墓以外の種類の遺跡が不祥という遺跡の有り様における不自然さが問題として存在する。なぜこれまで十分に問題とされてこなかったのかということについては、敢てここではふれないが、周辺との関連性を考慮するうえでも明確にすべき課題であろう。すなわち石器時代に遡る遺跡の存在については、かつてクーンがイランの諸洞窟を含む一連の中近東洞窟遺跡調査研究にのっとり提唱した人類拡散ルート上に当該地域があること（図9）⁽¹⁶⁾、あるいはまた、デイラマーンの「ラスルカン遺跡」（＝サラーンサル遺跡）第二層については「土器を全然伴出しない」、「土器以前の文化段階」、「プレ・セラミックの段階」が注意されそして「竪穴遺構」や「配石遺構」の検出されていたことなどはやくに問題提起されたが、具体的進展にはいもって乏しく、再考されるべく残された課題のままなのである。⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾今後これらを考

図9 クーンの唱えた石器時代人類東漸経路 (Coon 1957, 296より)

察しようと試みるならば、考古学調査の常套として、どこにどのような遺跡が存するかについての信頼できる踏査データ作成が先ずは不可欠となる。実際現地に立つと、先のマールリーク遺跡とキャラーラズ遺跡が川を挟んで相対峙するのは、セフィードルード川が山間から流れ出てのちはじめて地勢の大きく開けるところであることが認識できる。この流域についてはイラン人研究者による遺跡分布調査の成果発表があり、中近東文化センターによる分布調査成果とともに、古代の墓域の立地や分布状況を当該地方に⁽¹⁹⁾いまでもみられる「垂直方向の移牧」との関連性から見直す試案を提示する基となっている。また、このセフィードルード川側からみればテイラマーンも、険しい谷筋に入り込んで後はじめて地勢の開ける盆地に位置することがわかる。一見隔絶の観があるものの古墓より出土する副葬品土器、青銅器資料には相共通するところが多いこと、そればかりかさらに東方のゴルガンやダムガン近辺出土土器のなかにテイラマーン出土の土器と同じ範疇に属するものが多く認められるという⁽²⁰⁾。セフィードルード川が、カスピ海南岸域とイラン高原とをむすぶ一大要路としてアルボルズ山系を縦断するばかりでなく、マンジールにおいて西北からの流れ（ギジールウズン川）と東南からのながれ（シャーフルード川）と合流し、山系を横走る渓谷沿の経路を形成していることに無関係ではあるまい。キャラールダシュトもサルダアブルード川上流に開けた山間域であるが、これもアルボルズ山系縦断路のひとつ、すなわち北流するチャールス川と南流するカラジ川とが開くチャールス／カラジ間路に連なって位置している。このような地域で、地勢的経路を考慮に入れそして問題意識を明確にもった分布調査が綿密になされれば、ターレシュ／アルボルズ山系のカスピ海に面するところにも、これまで述べてきたような

くつかの先例あるいは隣接域の諸例から類推して、先史時代の明確な証跡が見い出せるであろう。

なお、当該域が湿潤地帯であることが遺跡の有り様にどう関係するのかについては、別の機会に譲りたい。

(本稿は、2000年度オリエント学会大会発表内容に加筆したものである。また、日本西アジア考古学会第5回大会における研究発表内容と一部重複することをお断りしておきたい。)

注

- (1) 大津忠彦, 山内和也「イラン考古学の最近の動向」『オリエント』38/1 (1995), 199-211.
- (2) 大津忠彦「イラン踏査」『MECCJ』nos. 1-6 (1992-1997).
- (3) 中近東文化センター『ギーラーン—緑なすもう一つのイラン—』, 1998; 大津忠彦, 岡野智彦編著『ギーラーン踏査—1997, 1998年度イラン遺跡踏査の記録—』, 2000.
- (4) P. E. L. Smith, *Palaeolithic Archaeology in Iran*, Philadelphia, 1986.
- (5) 大津忠彦「ギーラーン州の古代遺跡—その発現と考古学的アプローチをめぐって—」『ギーラーン—緑なすもう一つのイラン—』所収.
- (6) H. de Morgan, “Recherches au Talyche Persan en 1901,” *Mémoires de la Délégation en Perse* 8, Paris, 1905.
- (7) C. F. A. Schaeffer, *Stratigraphie Comparée et Chronologie de l'Asie Occidentale*, London, 1948.
R. H. Dyson, Jr., “The Archaeological Evidence of the Second Millennium B. C. on the Persian Plateau,” in I. E. S. Edwards *et al.* (eds.), *The Cambridge Ancient History* (3rd ed.) Vol. 2, Pt. 1, Cambridge, 1973.
- 江上波夫「タリシュのドルメン文化」『アジア文化史研究 要説篇』, 1965.
- (8) H. Sadek-Kooros, “Early Hominid Traces in East Azarbaijan,” *Proceedings of the IVth Annual Symposium on Archaeological Research in Iran*, Tehran, 1976.
- (9) A. Hakemi, “Kaluraz and the Civilization of the Mardes,” *Archaeologia Viva*, no. 1, Paris, 1968.
id., “Excavations in Kaluraz,” *Bulletin of the Asia Institute of the Pahlavi University*, Shiraz, 1973.
- (10) Hakemi, 1973.
- (11) E. O. Negahban, *Marlik The Complete Excavation Report*, 2 vols., Philadelphia, 1996.
- (12) V. E. Crawford, “Beside the Kara Su,” *Bulletin of the Metropolitan Museum of*

- Art*, Vol. 21, no. 5, New York, 1963.
- (13) C. S. Coon, *Cave Exploration in Iran*, Philadelphia, 1949.
id., *Seven Caves—Archaeological Exploration in the Middle East—*, London, 1957.
 C. B. M. McBurney, “Preliminary Report on Stone Age Reconnaissance in North-eastern Iran,” *Proceedings of the Prehistoric Society*, n. s. Vol. 30, Cambridge, [1964].
- (14) 山内和也「イラン考古学の新発見」『古代オリエント博物館紀要』17 (1996).
- (15) 注(11)を見よ.
- (16) 注(13)の Coon 1957.
- (17) 江上波夫編著『デーラマン I—ガレクティ・ラスルカンの発掘—』, 1965.
- (18) 千代延恵正「テイラマーン再考」2000, 大津, 岡野編 2000所収.
- (19) 山内和也「ギーラーン・セフィードルード西岸の古墓群について」『日本西アジア考古学会第4回総会・研究発表会』, 1999.
 同「セフィードルード川兩岸の古墓群について—垂直方向の移牧からのアプローチ—」2000, 大津, 岡野編 2000所収.
- (20) 注(18)の千代延 2000.